立山芦峅寺の媼尊と西正院大姥堂（長野県大町市）の大姥尊伝承

細木ひとみ

はじめに

芦峅寺集落に祀られる媼尊は、「おんばさま」と呼ばれ、集落の人々に大切にお祀りされている[1]。近世期につくられた縁起類などには、媼堂に本尊３躰とその両脇に当時の日本の国の数である66躰が祀られていたと記されている。しかし、明治初期の神仏判然令による影響で、媼堂は破却され、現在では14躰が残るのみである[2]。そのうちの１躰の像底部に「永和元年六月　日／式部阿闍梨□□」と記された墨書銘がある（写真１・２）。これにより、少なくとも永和元年（1375）には媼尊が芦峅寺で祀られていたということがうかがえるが、当時どのように祀られていたのか、誰が祀っていたのかなど、まだまだ不明なことが多い[3]。

平成29年度の夏に開催した前期企画展「うば尊を祀る」では、芦峅寺集落での媼尊信仰と、その信仰の諸国への広がりについて紹介した[4]。しかし、芦峅寺の媼尊との関わりを伝える、長野県大町市の西正院大姥堂の大姥尊については、芦峅寺との関わりの一端を挙げるにとどまり、「なぜ関わりを伝えるのか」という点を考察することができなかった[5]。

そこで、本稿では、芦峅寺の媼尊を考えるにあたり、大町市の西正院大姥堂の大姥尊との関係を整理しつつ、芦峅寺との関わりを伝える伝承について再度考えていきたい。

写真１　芦峅寺の媼尊坐像（媼堂の御本尊とされる３躰）

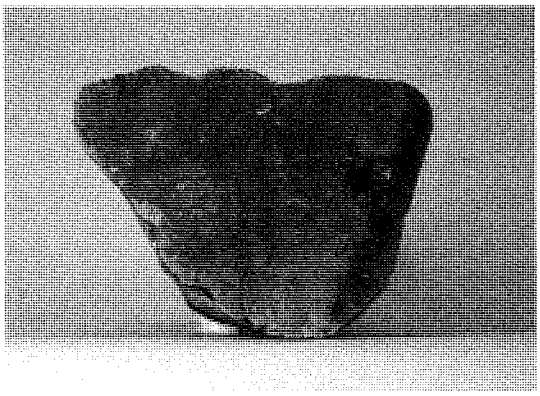

写真２　像底部にある墨書
（写真１の中央の媼尊）

1．西正院大姥堂の大姥尊の由来

長野県大町市平野口（旧野口村大出）にある西正院は、「大姥堂」とも呼ばれ、「木造大姥尊坐像」（大町市指定文化財・写真３）を祀っている。この大姥尊像は「秘仏」とされ、７年に一度の御開帳でしか、その御姿を拝むことはできない。

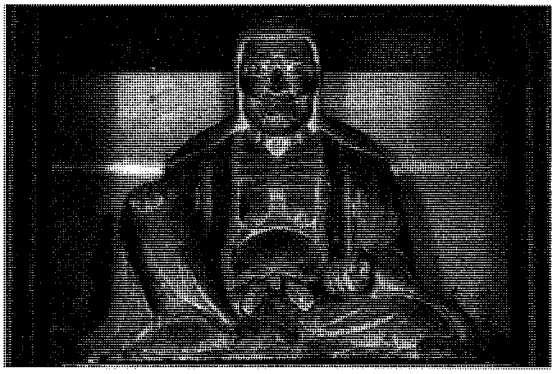

写真３　西正院大姥堂の大姥尊坐像
（写真：大町市文化財センター提供）

『大町市の文化財』[6]によると、像高が39.5㎝、ヒノキ材で室町時代中期の造像と推定されている。さらに、「頭に白布をかむり寛闊（かんかつ）の（※ゆったりした）着物をまとい、帯を前結びにして垂らす老媼の姿である。右脚立ひざ、左脚は平に組む。右掌は右ひざに伏せ、左股に置いた左手には持物（麻の種か）があったらしい。眉根を寄せ、大きな眼をむき、歯牙をむき出し、カッと口を開く忿怒の相である。胸をはだけ、乳房を垂れ、肋骨をあらわにし、腹を前につき出している」と説明されている。

その功徳について、市立大町山岳博物館の展示解説書には「女性を病や難産から守護するという女人救済という性格のほか、今では山仕事の安全や子供の夜泣き・疳（かん）の虫封じにご利益がある一仏として信仰されている。かつて、西正院近辺には「山の神」という小字名が残っていたといい（現在、西正院の西方に大出山の神が祀られるが、もとは西正院の場所にあったものが遷されたのではとの推測もある）、大姥尊像と山の神信仰との結びつきをうかがわせる。さらに、堂宇が位置する集落と山を結ぶ三叉路（さんさろ）という場所（境界）や、佐々成政による冬の北アルプス越え伝説と結びついて伝承されていることから、大姥尊像がこの場所に祀られることになった背景には元来からの山の神信仰があったと考えられている。つまり、西正院大姥尊像の信仰は、山の神信仰の拠点となっていた場所に、近世における立山信仰の思想が流入し、女人救済のための女人堂という性格が付帯されて成立したものと推測されている」[7]とある（写真４）。「山の神」としての性格は芦峅寺の媼尊にも見られるが、廣瀬誠氏が『立山黒部奥山の歴史と伝承』[8]の中で、「芦峅寺の姥堂が女人堂の性格をもち、女人救済を強く説いているのに対して、大出の姥堂は子供の守護神という性格が強い」と述べているように異なる部分も持つ。

写真４　大出の山の神

そして、この大姥尊には立山と関わる伝承が２つ伝えられているので、次に紹介したい。

１つ目は、大姥尊像が現在安置されている厨子に、文政９年（1826）10月28日に記された墨書があり、「棟牒（むなふだ）／元和三丁巳年八月廿八日夜／越中立山ヨリ飛給霊尊／御姥大権現厨子　壹宇」と記されている（写真５）。文政９年にはこの大姥尊は「御姥大権現」とされ、元和３年（1617）の８月28日の夜に、越中立山より飛んできた霊尊だと伝えていたことがわかる[9]。

２つ目は、西正院大姥堂にかかげられている昭和５年の「大姥御本尊御縁起」（写真６）に見える。この縁起には（縁起の傍線、句読点は加筆）、

抑も當西正院の御本尊は大姥菩薩と申奉留、今茲仁其の御縁起として傳ふ留所を記さんに、今を距る。壹阡百貳拾餘年前、人皇第五拾一代平城天皇の大同年間、洛東延暦寺の開祖傳教大師唐より天台宗を傳へ帰朝の後、越中國立山を開かんと、三七日間法華経を読誦せられけ留結願の日、其第八巻陀羅尼品に到り忽然として顕前に大姥の御尊容出現し、吾此處に汝を待つ事年久し、吾は是れ一切有情延命守護の

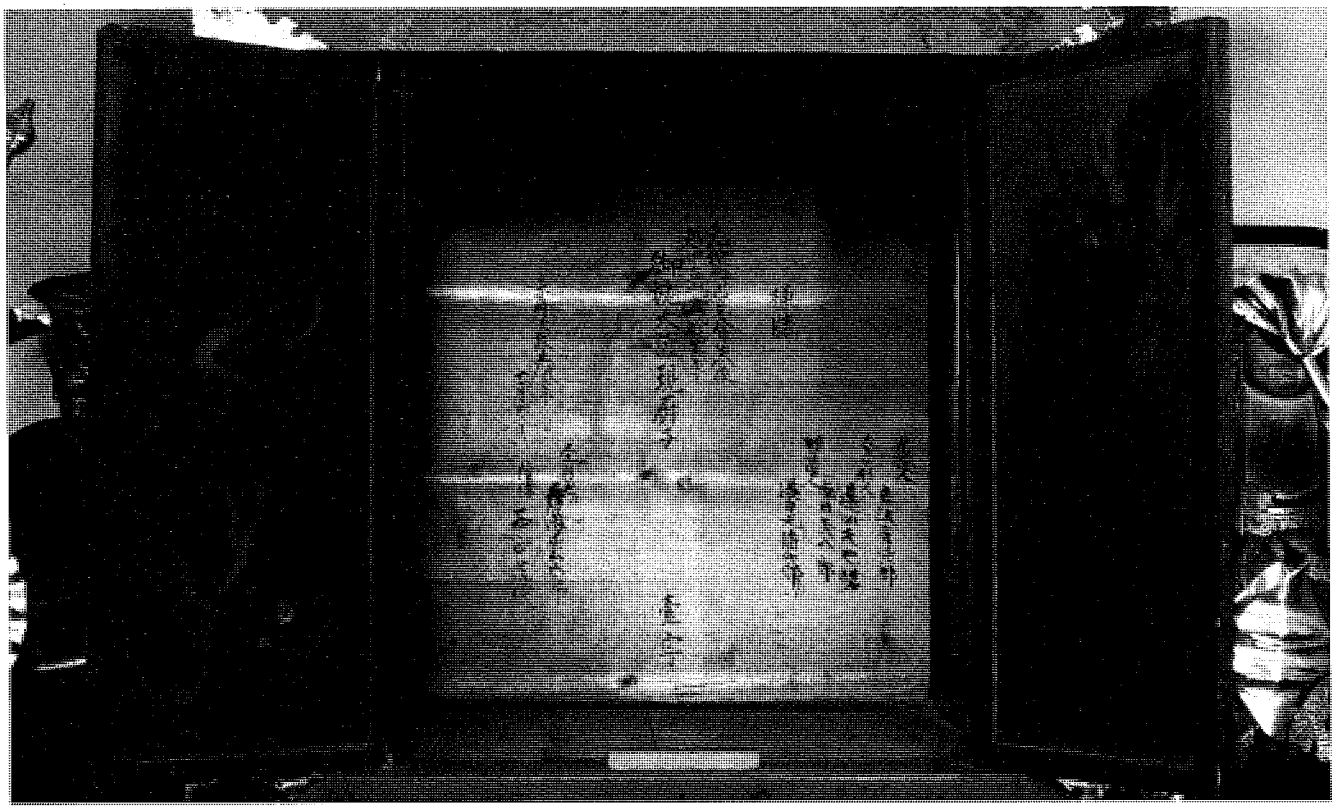

写真５　厨子にある墨書

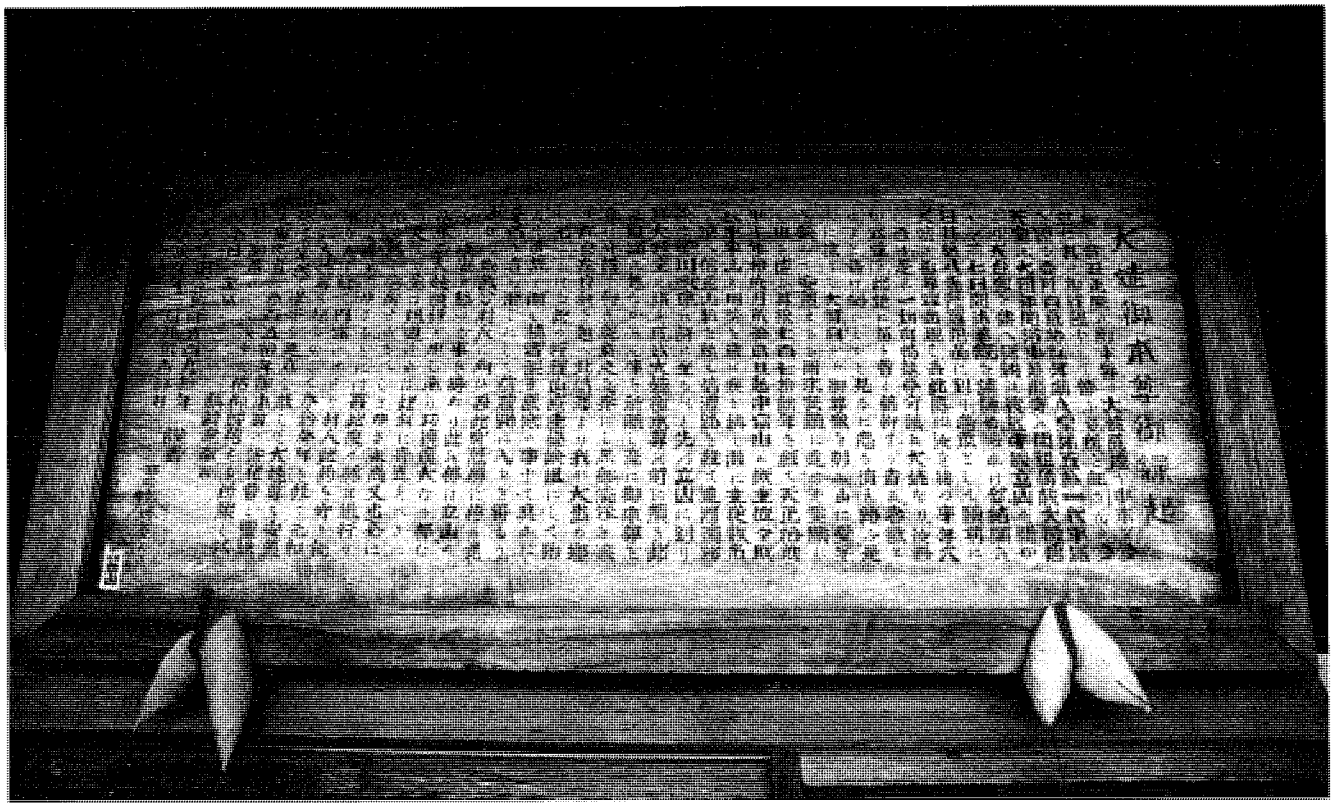

写真６　西正院大姥堂の大姥御本尊御縁起

大姥なり。汝吾が容像を此地に留め、普く信仰する者の表徴とせよと告げ給ひしかと見るに忽ち消え給ふ、是れに拠りて大師自から御尊像を刻み.山に堂宇を営みて安置せらる、爾来誓願に違はず霊顕れし由を傳ふ、其後七百七拾餘年を経て天正拾貳甲申年拾貳月貳拾貳日、越中富山の城主佐々成政軍事上の用務を帯び、疾と称し潜に主従数名を随へ信飛山脈を越え、信濃路を経て遠州濱松なる徳川家康の許に至るべく、先づ立山に到り其大姥堂に詣す、成政大姥御本尊の前に額き此の難路の恙なからん事を祈願し、竟に御本尊を享け守護と仰ぎ従者之を脊にし、黒部渓谷を渡り左良左良越を越へ、北葛澤より我が大出の郷に出られける、此の行程山嶽重畳嶮岨にして殆んど道無く而も、積雪深き厳寒の事とて具さに苦を嘗め、漸々にして信濃路に入るを得たりやがて成政公村人に向ひ、吾此守護仏に依り恙なく峻嶽を越ゆる事を得たり、此の仏は立山の御本尊大姥菩薩と申し奉り、功徳広大なる仏なり、之より先は坦道なれば此村に寄進すべきに依り、篤く信仰せらるべしと申され尚又出発に際し、重ねて申さるるには吾此度の旅は微行の事なれば総て内密にせよと、村人此約を守り秘かに大姥尊を祀る、かくて参拾参年を経て元和参丁巳年改て堂宇を建立し恭しく大姥尊を安置す.爾来実に参百五拾年、御本尊の法化普く霊験々顕著にして人々の信仰帰依する所深く、以て今日に至留。

称辞竟奉留

神武天皇紀元貳阡五百九拾年

昭和五庚午三月廿貳吉祥日　　謹書

西明隠徳妙法山□

と記されている。

要約すると、大同年間（806～810）に傳教大師（最澄）が唐より帰朝後、越中国の立山を開こうと三七日（21日間）法華経を読誦し、結願の日に第八巻陀羅尼品にいたると、大姥の御尊容が出現したという。そして、「吾は是れ一切有情延命守護の大姥なり。汝吾が容像を此地に留め、よく信仰する者の表徴（象徴）とせよ」と告げたので、傳教大師が自ら尊像を刻み、山に堂宇を建立して安置したというのである。その後、天正12年（1584）12月22日、富山城主の佐々成政が主従数名を随えて信飛山脈を越え、遠州濱松（現：静岡県浜松市）の徳川家康のもとにいたるために、まず立山の大姥堂に参詣し、御本尊の大姥尊にこれからの難路を無事であるよう祈願し、大姥尊を従者が担いで黒部渓谷を渡り、「左良左良越」（さらさら越え）を越えて北葛澤から大出へと出て来たという。そして、佐々成政公の「内密にせよ」の約束を守り、秘かに祀っていたが元和３年（1617）に堂宇を建立して、うやうやしく安置したのだといっているのである。つまり、昭和５年には、立山の姥尊が傳教大師の御手によるものだとし、「天正12年に佐々成政公がさらさら越えの際に立山大姥堂から本尊の姥尊を運び、当村に安置した」と伝えているのである。

この縁起に記される佐々成政は、天文５年（1536）に尾張国で生まれた。織田信長に仕えて武功を立て、天正３年（1575）越前府中（現：福井県武生市）に入り、天正８年（1580）越中に派遣され、天正10年（1582）富山城主となった人物である。本能寺の変後も、豊臣秀吉によって越中支配が認められて越中を平定しており、富山県内においても有名な武将である。

では、それぞれの伝承を見比べてみたい。

１つ目の伝承では、元和３年に立山から飛んできた霊尊といい、２つ目の伝承では元和３年に堂宇を建立したという。共通している「元和三年」という年号は、厨子内に記された墨書から「大姥御本尊御縁起」に記されたのではないかと考えられる。

しかし、現存している史料の中で、最初にこの大姥堂が確認できるのは、地元の寺社について記した元文５年（1740）の「大町組寺社仏閣帳」[10]であり、野口村内に、

南向権左衛門持分

一姥堂　三間二弐間　萱葺

堂地東西江三間半南北へ弐間

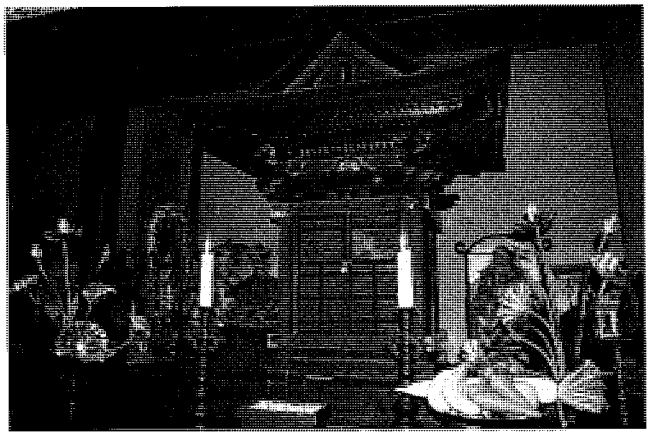

写真７　大姥尊像を祀る厨子

写真８　扉下の墨書部分

とだけ記されている。そうすると、元和３年（1617）には、寺社仏閣として見なされていなかったという可能性もあるが、野口村に大姥尊が存在していたのかどうかもはっきりしないのである。

それにしても、なぜ厨子に「元和三年八月二十八日夜」に越中立山より飛んできた霊尊と墨書されているのかが不思議である。もう１点気になるのが、厨子が製作されたとみられる「文政九年」（1826）である。先に紹介した史料に大姥堂が確認できるので、この時には野口村（大出村）の人々に祀られていたことがうかがえる。さらに、厨子の扉下には多くの人名が「次第不同」（順不同）として墨書されていることから（写真７・８）、村全体、または近隣の人々も含めて、この周辺で文政９年（1826）に立山との関わりを強調する動きがあったようにも思えるのである。そこで、このことについて次に考えていきたい。

２．立山芦峅寺の媼尊と信州野口村

ここでは、西正院大姥堂の大姥尊が安置されている厨子に記されている「元和三年」（1617）と「文政九年」（1826）を手がかりに、立山芦峅寺と、大姥尊が祀られている信州野口村（大出村）との関わりを見ていく。

まず、厨子については、墨書より文政９年（1826）10月28日に、「吉沢常次郎」をはじめ、大野の「遠山久也勝」「原田義八郎」と野口の「渋田見脩四郎」が世話人となって、大工の吉澤奈五郎が製作したものであることがわかる。

芦峅寺との関わりとしては、これより39年前の天明７年（1787）の史料に、信州を主な檀那場としていた芦峅寺の宝伝坊が野口村周辺で勧進活動をしていたことがうかがえる。この史料では、芦峅寺の宝伝坊が芦峅寺の媼尊の功徳を説き、芦峅寺媼堂の脇立として観世音菩薩像を建立するよう勧めており、この趣旨に賛同して寄進した荒井権右衛門へ天明７年（1787）に差し出した証印である[11]。芦峅寺媼尊への施主にはその功徳として、現世では「寿命長遠」「子孫繁昌守護」が、来世では五道（の）重罪を滅して「則心成仏」に疑いなしと記してある。寄進した新井（荒井）家は、大澤寺領駒沢村源汲（現在の大町市平源汲）にあったことから、天明７年には西正院大姥堂周辺に芦峅寺の媼尊の功徳が広まっていたことがうかがえる。

さらには、同じく信州を主な檀那場としていた芦峅寺の教蔵坊も、寛政元年（1789）に媼堂の脇立として地蔵大菩薩と観世音菩薩を建立すれば芦峅寺・媼尊の功徳を得られ、宝前に六種の妙供を献じ、戒名・俗名を記置いて永代回向の勤めをしますと記した証印[12]を発行していたようである。そして、文政８年（1825）７月に、教蔵坊の照界が願主となって信州松本の人々を中心とした立山講中から銅造の地蔵菩薩像なども寄進されている[13]。

以上のことから厨子が製作された「文政九年」を考えると、文政９年までには芦峅寺の媼尊の功徳が宝伝坊や教蔵坊によって、野口村のほか松本にも知れ渡っていたと考えられ、野口村の人々が大姥尊に芦峅寺の

媼尊との関わりを語った理由も理解できる。

では、「越中立山ヨリ飛給霊尊」としている「元和三年」（1617）はどうであろうか。

佐々成政の後の立山は、豊臣秀吉より越中支配を任せられた前田家が治めており、元和３年は慶長10年（1605）より加賀藩３代藩主として前田利常が領有していた時期である。前田利常は、２代藩主前田利長とともに、これまでの領主が山域を領地の対象としておらず、信州のみならず、越後・飛騨との国境線が明確ではなかったことに着目し、立山・黒部（黒部奥山）に関心を寄せ、実態を把握しようとしたのである。特に、前田利常は黒部奥山について詳しい浦山村の伝右衛門を呼び寄せて事情を聞くとともに、黒部奥山の取り締まりの役に当たらせている[14]。

その後、慶安元年（1648）には、芦峅寺の十三郎が父親とともに佐々成政のさらさら越えの道筋の検分を命じられて調査を行っており、その功によって、加賀藩から特別の優遇を受けた次第を書き上げた文書を明治元年に写したものがある[15]。これには、佐々内蔵助殿がお通りになられたさらさら越、信州まで御奉行大嶋甚兵衛殿・岡田助三郎殿・金森長右衛門殿が検分する間、親子で案内し、さらさら越え山道の次第を絵図に記したことが記されている。加賀前田家は、佐々成政のさらさら越えルートを警戒し、調査していたのである。

これに対して、前田家以前の寺嶋職定（もとさだ）の書状[16]には、

急度申越候。仍信州江罷透之儀、先以可相留候。此上も於罷越者、諸商人可令成敗候。此段横江太郎兵衛ニ可申聞候。猶口上ニ申出候。謹言。

二月廿六日　　職定（花押）

葦峅門前

百姓中

とあり、芦峅寺から信州へと通行する道があり、芦峅寺の百姓中が信州へ行き来していたことがわかる。この書状は、寺嶋職定が池田城（現：立山町池田）に永禄12年（1569）から13年（1570）年ごろ在城していたのでこのころの文書だと考えられ、つまり1500年代には芦峅寺と信州を結ぶルートがあったということになる。

しかも、元禄11年（1698）５月の「加賀川嶺と野口山境之書付」[17]には、

差上ケ申口上書之事

一　加賀川入嶺ヲ越、たいら河江下り御境ハ、川限りニて御座候。川向之儀ハ越中足倉山ニ而御座候と申伝へ候事。

一　北之御境ハ、すばり越と申ゟ川下江ハ場所恐敷人通り申事不相成候故、様子不存候御事。

一　南之御境ハ、不動嶽西之ふもとゟ段々嶺つる高瀬入本川筋、水また之嶺御境ニ而御座候。夫ゟ裏之儀ハ山之名所も不存、誰様御領分共不存候事。

右之通、少も相違無御座候事

元禄十一年戌寅年五月十八日　　大町与野口村

庄屋　九郎右衛門（印）

与頭　次郎介　　（印）

同所　弥三郎　　（印）

永田次兵衛殿

曽根原伊右衛門殿

とあり、野口村では黒部川を越中と信州の境としていたことがうかがえる。

また、正徳２年（1712）７月の「野口村たいら山杣頭口上書」には、木曽奈川の杣頭・喜三郎たちが針ノ木谷へ入り、木屋を作って泊り込みで板を挽いていたところ、黒部奥山廻り役の勘左衛門らに何者かと問いただされたとある[18]。喜三郎たちは「松本藩の元締めに頼まれて板材を挽いている。川向では一切木を伐

らないように言われたので、川よりこちらで伐っています」と言うが、勘左衛門からは、嶺が境で加賀藩の山であるから早々にしまって帰るように言われる。そして、最後には木屋を焼いて立ち去っており、加賀藩と野口村の間では国境の認識が違っていることがわかる。

しかしこのことは、黒部渓谷について『大町市史』第３巻近世[19]に、

野口村の杣人たちは、良材を得、熊、カモシカ、岩魚などのかっこうの魚場として深渓を究め渉猟していた。ここには、領内「野口だいら山」という認識での自由な山入りの歴史がある。

とあり、野口村の杣人たちにとって山の恵みを得られる場所であったことから、黒部奥山の取り締まりが野口村の人々にとって大問題であったことがうかがわれるのである。

さらに、嘉永３年（1850）には野口村の善右衛門が加賀藩に新道開削を願い出ており、その中にはこれまでの記録に「当村大宮前ゟ越中新川郡岩倉御姥尊橋まで道法（のり）拾壱里弐拾壱丁と書印（しるし）」があったので、そこまで大道を通させていただきたいと記してある[20]。結局はこの願いは許されなかったが、この時の野口村の人々の立山への道の必要性もうかがえる。

そうすると、加賀藩に対して野口村と立山との関わりを強調するために「元和三年」としたと考えることができるのではないだろうか。

それでは、佐々成政のさらさら越えと野口村との関わりはどのようなものであったのであろうか。佐々成政の「さらさら越え」が有名になったのは、小瀬甫庵が江戸初期に刊行した『太閤記』をはじめ、多くの伝記に記されているからで、これらによって広く知れ渡ったと考えられる。これらの書物をみると、ザラ峠や針ノ木峠を越えたとされるルートについて、「ザラ峠」（2348m）を越えて黒部川に下った後、針ノ木谷を登りなおして「針ノ木峠」（2541m）を越えたというのである。このほかに、黒部川から先を針ノ木谷から北葛岳に登って屋根伝いに鳩峰を下り、高瀬渓谷を経由したというものや、黒部川までは立山から内蔵助平へ下ったというものもある[21]。

そこでまず、佐々成政の「さらさら越え」を中心に、佐々成政と立山芦峅寺との関わりについて考えていきたい。

３．佐々成政の「立山」への信仰

西正院大姥堂が語る「さらさら越え（ザラ峠・針ノ木峠越え）」伝説は、富山県内でも広く知られている。しかし、その際に無事を願って、佐々成政が芦峅寺の媼堂へ参詣した話や芦峅寺の媼尊を担いで越えたという話は、芦峅寺をはじめ、近隣地域にも伝わっていないのは不思議である。

まず、「さらさら越え」を行ったと言われる背景について簡潔に紹介したい。

天正12年（1584）、羽柴秀吉と、織田信雄（のぶかつ）・徳川家康の連合軍が小牧長久手の地で対峙し（小牧・長久手の戦い）、織田・徳川軍に味方した成政は、同年八月の末森の戦いで、秀吉方の前田利家と対立して、九月に利家軍の末森城（現：石川県羽咋郡宝達志水町）を取り囲んだ。しかし、前田利家軍による明け方の背後からの奇襲により、成政軍は倶利伽羅峠まで退くこととなり、惨敗を喫したのである。一方、越後では、成政方を攻める好機とし、上杉景勝軍が越中境へと押し寄せて火を放っている。さらには、成政による反逆にあった秀吉の命により、10月に越前の丹羽長秀の軍勢が前田利家のもとへ駆けつけているのである。

11月になると、主君・織田信雄が秀吉と和睦する。家康も次男の於義伊（結城秀康）を人質に差し出すことを条件に停戦を申し出ている。つまり、成政は、織田・徳川軍に味方し、秀吉と対立していたにもかかわらず、両者が秀吉と和睦してしまったのである[22]。このように窮地に立たされた成政は、当時浜松城主であった徳川家康に会うために浜松へと向かったのであるが、そのときに厳冬期の立山（ザラ峠）を越えたというのである。

それでは、富山城主としての佐々成政と立山の衆徒たちとどのように関わりがあったのかを見ていきたい。その関係は、現存している寄進状からうかがえる。

まず、岩峅寺文書に残る寄進状では、天正11年（1583）８月20日に、これまでと同じように立山権現の諸堂建立や祭礼に精を入れて行うことを約束した立山寺（岩峅寺）衆徒によって、岩倉へ三百俵分、寺田へ百五十俵分を寄進したものである[23]。

芦峅寺に残るものとしては、芦峅寺一山文書の中に、天正11年（1583）のものと考えられている「立山寺目代書状」がある[24]。これは、立山寺（岩峅寺）が反銭のことについて佐々成政に交渉したところ、旧のごとく寄進と決定したということを芦峅と本宮に報告しているものである。

同じく芦峅寺一山文書に残る天正12年（1584）霜月（11月）の寄進状では、立山中宮寺の衆徒・社人中に、芦峅と本宮を安堵したもので、堂宇の修復をし、毎日の神供と宝前での祈念を怠ることがないようにと述べているのである[25]。

これらの資料を見ると、佐々成政が立山寺（岩峅寺衆徒）や中宮寺（芦峅寺衆徒）に対して寄進し、立山権現への祈念を怠ることが無いように命じており、立山へ信仰を寄せていたことがうかがえる[26]。そうすると、芦峅寺や岩峅寺といった立山衆徒たちが佐々成政との関わりを伝えるのは当然の話である。

それでは、本当に佐々成政一行は「さらさら越え」を敢行したのであろうか。これについては、多くの先学者によって研究され、熱く議論されているが、未だに決着がついていないように思われる[27]。

立山のザラ峠や針ノ木峠を越えるルートを通ったとされる説で、頻繁に紹介されている資料としては、芦峅寺日光坊の享和２年（1802）の「當山媼堂中宮寺出世祭事　休坐」があげられる。これは佐々成政の「さらさら越え」から218年後に書かれたものとなる。昨年秋に、日光坊の史料群の中からこの史料のコピーを発見したので、原史料ではないが私なりに少し検証したいと思う[28]。

一丁目裏に「立山若宮座主日光坊勤次第　口傳有」、八丁目表に「享和弐戌ノ天八月日　座主日光坊現住大圓」とあるので、この史料は享和２年（1802）に若宮の座主である日光坊大圓がこの勤めの次第を書いたものであることがわかる。そして、二丁目表に「金峯山修行秘密ノ次第」とあるので、特に金峯山（大日岳）での修行の秘密次第が書かれていることがわかる。この史料の中の一つ書きの１つに佐々成政の名前が記されているので、その部分を以下に紹介する（傍線、句読点は加筆。原本ではないため、判読できない字も多い）。

一ヒデハ炎魔堂ノ前ニ立

右ノ棟執行次第、如此シ入部ノ内ニ秘蜜留リ有之候へ共、此書ニハカ□（カヵ）レズ以後ニ至テモ此書悪敷披（ヒ）見シ、亦ハ他ニヲイテハ忽天八ツトコウムルヘキ事無疑ヒスベシ之當社ノヒミツ也。ムカシノ本キレハテ、ツヽキナクミヱ不申候故、アラマシニシルス。

<u>佐佐奥州守殿當峯口取立之時</u>

一両寺ゟ入人之覚

大先立　　度々
　圓光坊弘栄　　弘泉坊

度々　　新客
　常生坊　　親知坊

新客　　新客
　明常坊　　圓光坊弟子三蔵房

　　同行六人

中宮寺

先立
　宝蔵坊

度々
　座主坊

度々
　寶仙坊

度々
　龍蔵坊

度々
　永蔵坊

新客
　密蔵坊

新客
　宝覚坊

度々
　長見坊

新客
　日光坊

是ハクラノスケ御心 □ハアンゴ
ソノタノミニ入

是ハカケカヤシニ入ル斗

同行九人

両寺合拾五人

守護様ゟ御布施次第

壱人ニ米十三表宛

亦懸出テ御礼ニ参、御札上ケ候ヘハ銭壱貫文宛、但壱貫文ニ付米八表宛買。其ゟなに□（はヵ）当峯退転（シヒ ケダイ）ニ成申候。

立山ルートを説く場合、「佐佐奥州守殿當峯口取立之時」の部分を「佐佐奥州守殿當峯口御立之時」と解読したように思える[29]。しかし、このコピーを見る限り「御立」とは読めず、「取立」のほうが当てはまる。そのように解読すると、この史料が佐々成政のさらさら越えに関する史料かどうかも判然としない。しかも、「御立」と解読していたために、これまで佐々成政のさらさら越えで先導したのは大先達の岩峅寺衆徒の「円光坊弘栄」をはじめ、同行として岩峅寺六人、芦峅寺９人と考えられていたが、その解釈自体に問題があるということになる。それでは、「両寺ゟ入人之覚」として記されている坊の衆徒たちは何をしたのであろうか。

芦峅寺伝来の延宝期（1673～81）までの古い文書記録を集めた、芦峅寺一山文書の第27号『旧記』（[30]傍線、句読点は加筆）には、

一佐々奥州守殿当峯御取立之節、先年ゟ有来ル坊者之覚立山中宮ニ而ハ

○宝蔵坊　○座主坊　泉蔵坊ゟ
日光坊出ル

長兵衛事
○寶泉坊　密蔵坊　○龍蔵坊

○永蔵坊　○宝覚坊　○長見坊

泉蔵坊ゟ出ル子
○日光坊

宝得坊出ル弟
○福泉坊

密蔵坊子
金泉坊

永蔵坊ゟ出ル弟
大仙坊

大学坊子
実相坊

惣太夫弟
玉仙坊

長見坊弟　　玉仙坊ゟ出ル
池ノ坊　　吉祥坊　　三学坊

此外ニ廿人社人都合三十八人峯入御祈祷仕リ、
守護様ゟ御布施トシテ大分被下、亦愚僧御礼ニ参、御礼上ゲ賽銭ニ壱貫文宛、但壱貫文ニ付米八表宛買申候。其ヨリ峯入之祈祷ケダイニ成申候。

とあり、先述した史料と似た内容が記されている。これによると、佐々成政が当峯（立山）を取り立てたときに中宮（芦峅寺）に有る坊として、18の坊の名前が挙げられている。そして、20人の社人とあわせて38人が峯入りして祈祷していたことがわかる。「當山媼堂中宮寺出世祭事」に記されている９つの坊はこの18坊に含まれている。

さらには、「守護様ゟ御布施次第」として「壱人ニ米十三表宛。亦懸出テ御礼ニ参、御札上ケ候ヘハ銭壱貫文宛、但壱貫文ニ付米八表宛買」とあるのも、「旧記」に「其ヨリ峯入之祈祷ケダイニ成申候」と記されていることから、これまでの「先導した報酬」という解釈ではなく、「祈祷代」というふうに理解できる。

つまり、享和２年（1802）の「當山媼堂中宮寺出世祭事」からは佐々成政がさらさら越えを敢行したとは言い切れず、また、さらさら越えに芦峅寺や岩峅寺の衆徒とどのように関わったのかも判然としないと言えよう。それよりも、佐々成政が芦峅寺と岩峅寺の衆徒に依頼して祈祷させていたことがわかる貴重な史料である。

そうすると、現存する史料から佐々成政が立山への信仰により祈祷代として芦峅寺や岩峅寺に寄進をしていることは言えるが、芦峅寺・岩峅寺の衆徒とさらさら越えの関わりを言うことができないということになる。

それでは、なぜ野口村の西正院大姥堂では、大姥尊の由来に芦峅寺の媼尊との関わりとして佐々成政のさらさら越え伝説を語るのであろうか。次にそこを考えていく。

４、立山芦峅寺の媼尊信仰と佐々成政

西正院大姥堂の大媼尊と佐々成政との関係を語るものは、現在、昭和５年の縁起だけであるが、西正院大姥堂では、古い年紀の「立山より飛んできた」という話より、「佐々成政が運んできた」という話のほうが広く語られていることである。さらには、厨子の墨書は、「本当の由来を表沙汰にできなかったための村人たちによる作り話である」ともいっているのである[31]。そこで、ここでは、芦峅寺の媼尊と佐々成政のさらさら越えの関わりがどのように成立したのかについて考えていきたい。

まず、佐々成政は「さらさら越え」をしたと言われる後の天正14年（1586）には、

覚　　蘆倉祖母堂

一常燈毎月可改之事
一正五九月護摩並能化扶持方事
一本宮山地子銭八貫文、日光坊可請取事
以上

米拾貳俵者　　十二ヶ月分
能化三人扶持
米拾八俵者　　十二ヶ月分
常燈
米拾俵者　　護摩入用
合四拾俵者
天正拾四年八月二日（黒印）
日光坊

とし、芦峅寺の日光坊へ扶持を与えて「蘆倉祖母堂」の常燈や護摩供養を欠くことがないように命じている[32]。この頃の佐々成政は、天正13年（1585）に豊臣秀吉に降伏し、大坂へと移り住み、越中では新川郡のみを治めていたが、この書状では、芦峅の中でも特に祖母堂（媼堂）について命じているのである。

そして、天保11年（1840）９月に、頸城郡福嶋村（現：新潟県上越市）の関根新左衛門が記した『越中立山参詣記』[33]には、

○媼堂開山堂弥陀堂等其むかし十三万石之寺領七千坊四十九院有之、大伽藍之地也。其後、佐々成政追打之時放火之跡、今礎のミ見ゆる。佐々成政は弥陀ヵ原ゟ一ノ腰へ掛りサラサラ越、信州野口村へ道下ル。芦峅之外（ソト）里の方一里程、一方ハ山、一方ハ谷、一夫万兵を防く之地也。夫より内、布橋之川有。其奥媼堂ニ指籠る時は容易ニ攻ル事不能。若シ弥陀ヵ原ニ五穀実ラハ日本稀成、困害之地と相見候也。

○媼堂之脇、石塔籠之銘ニ大隅守佐伯老翁七十才、此人佐々成政之時奉行役相勤、佐々家落城之時打死いたす。

とあり、佐々成政のさらさら越え伝説や佐々成政の家臣の銘がある石灯籠について記されている[34]。芦峅寺でさらさら越えの話を聞いたのか、多くの書物から立山の伝説として知っていたのかはわからないが、立山への参詣者が立山との関わりとして佐々成政の「さらさら越え」をも紹介しているのである。つまり、天保期にはそれほど有名な話だったということになる。

そしてさらに、芦峅寺の媼尊と佐々成政の関わりが強くうかがわれるのが、「旧社　新川姫神社に復旧再興出願書」[35]に綴じられている、県令・山田秀典に明治９年２月24日に出された「旧社再興之儀ニ付願」である。

舊社再興之儀ニ付願

先般諸神社御調、湮埋ノ社地検霎致考證可差出旨、御布達ニ付御届申上置候。私共村内ニ往古ヨリ新川神社ト傳称仕候神形石五町余ノ社地御座候。其勧請年月不詳候得共、貞観九年又同十八年両度ニ神階ヲ授ケ給ヒシ新川姫命トハ正ニ此神社ニ御座候。然處漸次佛法隆盛ノ機運ニ付新川姫ト申御名ニ因テ老婆ノ木像ヲ彫刻仕、媼（うば）尊ト称シテ本殿ニ勧請シテ、至重ノ神形石ヲ、其境内清浄地ヲ撰ミ柵ヲ構ヘテ安置仕、鳥居等取除候。奉仕ノ社僧三十三名・神職五名、都合三十八名罷在候。然處建久年間頼朝卿治世ニ當テ社領御寄附ニ相成候。其後應仁ノ兵乱ニ神殿并其證書等焼亡仕候。亦其後佐々成政及當郡松倉城主長城等ヨリ社田寄附有之。次テ天正十六年十一月晦日舊藩主前田利家卿ヨリ攷テ姥尊ヘ百俵寄附ニ相成、且右神形石柵等モ明治元年マテ修繕ニ相成来候。當一村諸役免除惣山弐百七拾万歩ハ無税ニ候處、御維新ノ際神佛混淆御停止之儀被仰出候ニ付、明治二巳年三月社僧・別當三十三名ノ者復飾ノ儀及出願候ヘハ願之通、舊藩ヨリ被申渡候ニ付、右百俵寄附地并證書被引揚、更ニ雄山神社神饌料トシテ芦峅寺・岩峅寺両村ヘ□（稟ヵ）米五拾俵宛、永ク被下候。於爰、媼尊像并堂宇等廃棄仕候。右神形石ハ舊来村内御鎮座ノ大宮ニ遷座仕候。且ハ舊記及村中古老ノ傳□等取調并前田利光卿ノ判物写一通相副指上之候間、何卒御詮議ノ上社号御免許被仰付候ハヽ

これによると、往古から村内に新川姫命を祀る新川神社があったが、仏法が隆盛になるにつれ、新川姫という名を老婆の木像であったので「媼尊」として祀ってきた、その証拠に境内には「神形石」を安置してきたと述べているのである。そして、慶久年間の源頼朝卿の治世には社領をご寄付いただき（このときの神殿と証書などは応仁の乱で焼亡）、佐々成政や松倉城主・長城（神保長誠ヵ）などが社田を寄付、天正16年（1588）11月には前田利家卿より改めて媼尊へ百俵寄付していただいたという。しかし、明治になり、媼尊像と堂宇などが廃棄されたが、旧記や村中の古老達からの調書、前田利光卿の判物写しを提出するので、詮議してなんとか社号を許してくださいと願い出ているものである。佐々成政の社田寄進や前田利家の媼尊への寄進の文書というのは、「越中立山芦峅寺古文書巻二」に収められている[36]。そのうち、佐々成政の寄進状の１つには、

葦峅本宮不相替令寄進候。全可有諸納者也。并東西不入不及申儀候。諸堂伽藍有之修復、神供毎日不可

油断候。弥於宝前可有祈念候。仍寄進状、如件。
天正十二年
申酉霜月日　佐々陸奥守（花押）
立山中宮寺
衆徒社人中

とある（写真９）。それに対し、これを明治期に写したもの（[37]、写真10）には、以下のようにある（傍線、句読点は加筆）。

<u>媼堂之威光承届候</u>。就其葦峅・本宮不相替令寄進候。全可有諸納者也。并東西不入不及申儀候。諸堂伽藍有之造営、<u>大日如来之佛供燈明</u>毎日不可油断候。弥於寶前可有祈念候。仍寄進状、如件。
立山権現寄進状別紙ニ岩倉有之
佐々陸奥守
天正十二年申酉霜月日　　有判
立山仲宮寺
衆徒社人中

写真９　佐々成政寄進状
（「越中立山芦峅寺古文書巻二」）

写真10　佐々成政寄進状
（明治期の写し）

２枚を見比べると、大きく違うところが２ヵ所ある。冒頭の「媼堂之威光承届候」という文言と、「大日如来之佛供燈明」という文言である。明治期の写しの元となる史料があるのか、文言を明治になって足しているのかは、現存している古文書群の中から文言が足されている原史料は見つかっていないため、はっきりとは言えないが、どちらの文言も佐々成政と芦峅寺の「媼堂」「媼尊」の関係を誇張したものであると言える。なぜならば、佐々成政が立山へ信仰心を持っていたことは先述したが、佐々成政から「媼堂の威光（いこう）が承け届きました」と記されていれば、「芦峅寺では特に媼堂を重要視していた」とその関わりを強調できるからである。さらには、江戸時代の縁起や勧進記に芦峅寺の媼尊１躰の本地を「大日如来」と言っており、「神供」と記しているところを媼尊と関係づけるためにわざわざ「大日如来の仏供・燈明」に言いかえたのであれば、やはりその関わりを強調できるであろう。つまり、佐々成政の寄進状に「媼堂之威光承届候」という文言を足し、「大日如来之佛供燈明」という文言に変更したとするならば、明治の神仏判然令による影響で起こった廃仏毀釈で媼堂が破却されようとしていた際に、芦峅寺の人々がこれを阻止すべく練った秘策が、「佐々成政」や「前田利家」といった武将が芦峅寺の中でも媼堂を篤く信仰していたと強く主張することであったと言える。

そうすると、以上のことから考えると、芦峅寺の媼尊と佐々成政との関係を強調する立山芦峅寺の動きを元に、野口村では「越中立山より飛んできた霊尊」としていた大姥尊に、立山の話として広く知られている佐々成政の話を語るようになったと考えられる。

おわりに

立山山麓の芦峅寺集落に、永和元年（1375）には「媼尊」が祀られていた。1700年代以降、芦峅寺衆徒の布教・勧進活動が活発になるとともに、立山縁起や勧進記などが作られるようになる。その中で、芦峅寺・媼尊は立山権現の親神で「一切諸仏衆生の母」とし、豊芦原辺りに、左手には五穀を納め、右の手には麻の種を執持し、媼の形で現れたと語られる。

さらには、寺島良安によって編纂され、正徳２年（1712）に成立した『和漢三才図会』[38]には、

芦峅寺（アシクラ）　一里、有坊、有媼堂　大寶三年卯四月十二日慈興上人老母卒于江州志賀、慈興自作母像、慶雲元年八月彼岸中日為葬禮法式、于今然。

とあり、媼堂に祀られる像が大宝３年（703）に亡くなった「慈興上人自作の母像」というのである。慈興上人の母親として媼堂の本尊となり、立山をすべての者の生死をつかさどる所としたことによって女人成仏の霊場が出来たのだというのである。芦峅寺の衆徒たちは、立山信仰の中心的存在として媼尊信仰をあげ、諸国で血盆経信仰と絡めて「女人救済」を語っていたのである[39]。

そして、先述した天保11年（1840）９月に関根新左衛門が記した『越中立山参詣記』にも、

旧九月六日暮六ツ半時芦峅着。教蔵坊差図ニ而善導坊ニ泊、翌七日朝八ツ半時御媼へ参詣仕候所、勤経最中ニ而山中無難之祈念をいたし御山ニ差掛ル。

と記されていたり、また、

○登山之節、別当江相頼、其日ニ（カ）媼様へ参詣いたし天気窺すべき事也。
　天気よろしき時ハ御貌　白し
　雨　なれハ　　〃班ニ成、又ハ青黒し
　風　なれハ　　〃御目蝋燭之火ノ如光ル

と記されていたりし、媼堂へ参詣において山中での無難を祈念したり、天気を占ったりしており、「山の神」としての性格が見られる[40]。

このような芦峅寺の媼尊との関わりを伝える姥尊が、長野県大町市・旧野口村大出の西正院大姥堂に祀られている。野口村の大姥尊の由来は２つあり、元和３年に「越中立山から飛んできた霊尊」というものと、佐々成政がさらさら越えをする際に無事を祈って芦峅寺の媼尊を担いできたというものである。

元和３年に飛んできたという伝承は、現在大姥尊が安置されている厨子の墨書からであり、この厨子は文政９年（1826）10月28日に製作されている。そして、この厨子が製作された文政９年ごろの野口村周辺では、芦峅寺の宝伝坊や教蔵坊によって、芦峅寺の媼尊の功徳が語られていた。また、「元和三年」は立山を支配していた加賀藩３代藩主前田利常が立山や黒部山中の取り締まりを厳しくした頃であった。こういったことから、野口村の人々が大姥尊に芦峅寺の媼尊との関わりを語ったものだと考えられる。

さらにもう１点、前田利常と芦峅寺の媼尊との関わりが見える。『越中立山参詣記』に「向テ左之方、厨子際下之方之一躰は、加州三代目之君人間之枯骨を以七日御籠、正写之御作躰也」とあり、今後の検討が必要だが天保11年（1840）には芦峅寺・媼堂に人骨で作ったとみられる前田利常の像もあったようである。

次に、野口村大出の大姥尊と佐々成政との関わりを考える上で、立山と佐々成政の関係を見たときに、佐々成政が芦峅寺や岩峅寺の衆徒らに寄進しており、立山への信仰心がうかがえた。しかし、佐々成政のさらさら越えと芦峅寺の衆徒や媼堂との関わりは現存している史料からは言えず、さらさら越えを敢行したかどうかも判然としない。

では、なぜ野口村大出の大姥尊に佐々成政の伝承を語るのか。このことを考えたとき、1500年代には芦峅寺と信州を結ぶルートがあったことから、江戸時代に広く知れ渡っていた佐々成政のさらさら越え伝説が、芦峅寺と野口を行き来する者によって芦峅寺の媼尊の話とともに伝えられたのであろうとも推測できる。さらには、明治初年の神仏判然令による影響で起こった芦峅寺媼堂の破却は芦峅寺衆徒らにとって大問題であり、媼堂の再興を願い出た書状に佐々成政の社田寄進の話を持ち出し、媼堂の荘厳な雰囲気を語っているのである。つまり、こうした芦峅寺の媼尊と佐々成政との関係を強調する立山芦峅寺の動きを元に、野口村では「越中立山より飛んできた霊尊」としていた大姥尊に、立山で広く知られている佐々成政の話を語るようになったと考えられる。

立山へ信仰心を寄せていた佐々成政の「さらさら越え」は、芦峅寺と野口村の関係を強調するには良い話であったはずである。なんと言っても、加賀藩藩主・前田家が警戒するほどの伝説なのである。このことは、岩峅寺・延命院文書にある寛延２年（1749）の「由来書上帳」[41]に、

> 松雲院様、享保元年正月於御城ニ立山之由来委ク御尋、大縁起小縁起佐々内蔵助殿御印迄御覧被為遊候時分モ立山ノ儀ハ不寄何衆徒共支配仕候而書上奉入御覧納申候。其節国限弐枚御目録ヲ以被為仰付頂戴仕申候。

とあり、松雲院様（五代藩主・前田綱紀）が享保元年（1716）に立山の大縁起や小縁起とともに、どういったものかは不明だが「佐々内蔵助殿御印」もご覧になられていることからも、佐々成政の動向を気にしていたことがうかがえるのである。

本稿では、立山芦峅寺媼尊と長野県大町市の大姥尊との関係について考察したが、今後も芦峅寺媼尊についての史料を詳細に整理し、芦峅寺媼尊と諸国で祀られている姥尊との関わりを検討していきたい。

［付記］

本稿は、平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書を基に、再度整理し加筆したものである。

本稿作成にあたっては、佐伯宏氏と大町市文化財センターよりご協力いただき、また富山県［立山博物館］主任学芸員の加藤基樹氏より助言をいただきました。

ここに記して皆様に御礼申し上げます。

［註］

（１）芦峅寺集落のうば尊は、「媼尊」と書く。「媼」の字は、佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』で「媼と田を三個重ねた字は、芦峅の峅の字と同様に、大辞典にも見当たらない。結局、立山衆徒独特の作り字であるらしい」と述べているように、芦峅寺集落以外では使用されていない独特な字である。

（２）すべて芦峅寺閻魔堂所蔵、うち５躰が富山県指定文化財。媼堂が破却された後、本尊とされた３躰は開山堂や閻魔堂などに移され、護持されてきた。現在は、芦峅寺閻魔堂に６躰、立山博物館常設展示室に８躰ある。

（３）芦峅寺集落の媼尊については、廣瀬誠氏『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、昭和59年10月刊）や石原与作氏「立山中宮寺ウバ神之性格」（『富山史壇』29号・30号、昭和39年・40年刊）、米原寛氏「芦峅寺うば尊の性格とうば尊像造立の背景－山姥の伝承から－」（『研究紀要』第８号、富山県［立山博物館］、2001年３月刊）などがある。また、平成21年度後期特別企画展『立山の地母神　おんばさま』展示解説書（富山県［立山博物館］、2009年９月刊）でも紹介している。

（４）詳細は、平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書（富山県［立山博物館］、2017年７月刊）を参照。

（５）立山芦峅寺の媼尊と長野県大町市の西正院大姥堂の大姥尊については、廣瀬誠氏『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、昭和59年10月刊）や岡江結香氏「北安曇地方のオオバサマ信仰」（『仁科路』第114・115号合併号所収、平成18年11月刊）、松崎憲三氏「長野県北部の大姥様信仰－虫倉山周辺と大町市域を中心に－」（『信濃』第69巻第１号通巻第804号所収、信濃史学会、平成29年１月20日刊）などでも紹介されている。

（6）『大町市の文化財（大町市指定文化財調査書改訂）第一版』（大町市教育委員会、平成元年１月刊）、18～21頁。
（7）市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」『山と人　北アルプスと人とのかかわり－人文科学系　展示解説書－』（市立大町山岳博物館、2014年３月刊）、45頁。
（8）廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、昭和59年10月刊）、45頁。
（9）『北安曇郡郷土誌稿』（信濃教育会北安曇部会編、郷土研究社、1930年刊）には、「元和三年八月二六日の夜西方の空が急に明るくなつて金色の光明が赫々として飛んで来り大出の里に落つた。奇異な感に打たれた村民は翌日その落ちた場所へいつてみたところがそれが大姥尊像であつたので驚いて堂宇を営んで祀つたとの事である」と記されている。
（10）元文５年（1740）の「大町組寺社仏閣帳」の原本が不明のため、未見。荒井今朝一氏よりいただいたコピーによる。
（11）「宝伝坊証印」（個人蔵、市立大町山岳博物館寄託資料）の内容を以下に記す。

證印曰
夫當山ト者諸佛瑞集之梵屈衆
生済度之霊地麓ニハ御媼尊道場ハ
諸尊之浄土極楽荘厳之大功徳也
然所ニ御脇立建立之施主現世ニハ壽
命長遠子孫繁昌守護給来也
ニハ五道重罪ヲ滅則心成佛無疑者也
依テ如件
立山願主
天明七未歳十月日　　寶傳坊
御脇立観世音菩薩

寂照潭月信女
惠山了智居士
明心自白大姉
實源妙照信女
延室貞壽信女
實山良法信士
恭應勤春禅定尼
新井権右衛門殿

（12）寛政元年（1789）の教蔵坊証印の版木（富山県［立山博物館］蔵）が残る。
（13）明治の神仏判然令による廃仏毀釈の影響で小矢部市の観音寺に移された。他にも、教蔵坊が願主の銅造地蔵菩薩半跏坐像が永平寺（福井県）へ、銅造聖観世音菩薩坐像が総持寺（石川県）へ移されている。
（14）この後、加賀藩は黒部奥山を「御縮山（おしまりやま）」として重要視し、十村役の一つの役として「山廻り役」を設け、一つの職務として「奥山廻り御用」を位置づけた。「奥山廻り御用」は、国境筋の警備をし、侵入者の状況を把握・報告をする、登山の期間だけの重要な職務であったのである。
　これについては、平成14年度後期特別企画展『絵図に見る加賀藩と黒部奥山』展示解説書（富山県［立山博物館］、2002年10月刊）と平成19年度前期特別企画展『奥山巡見―奥山廻りのダイナミズム』展示解説書（富山県［立山博物館］、2007年７月刊）に詳しい。
（15）「就御尋重三郎由緒帳」（廣瀬誠編『越中立山古記録』第３巻所収、立山開発鉄道株式会社、平成３年10月刊）。
（16）芦峅寺一山会蔵、「越中立山芦峅寺古文書巻二」所収。富山県指定文化財。
（17）曽根原家文書。市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」『山と人　北アルプスと人とのかかわり－人文科学系　展示解説書－』（市立大町山岳博物館、2014年３月刊）、16～17頁。
（18）西沢家文書。市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」『山と人　北アルプスと人とのかかわり－人文科学系　展示解説書－』（市立大町山岳博物館、2014年３月刊）、17～20頁。
　また、同書の15頁には「1712（正徳２）年７月、針ノ木谷下部の黒部川右岸周辺に木屋（杣小屋）を作って泊りがけで杣仕事を行っていた信州の者たちに対し、それを発見した奥山廻り御用の越中の者たちは、盗伐であるとして数日の交渉後、木屋に火を掛けるという実行行使で追い出すという一件があった。信州の者は黒部川から西側の山での伐採

は一切行っていないと主張したが、越中の者は加賀藩の国境が針ノ木峠まで増えたので針ノ木谷は加賀藩の山であると迫ったのであった。追い出された者たちは、松本藩内野口村の元締めから伐木・運材作業を請け負った木曽奈良川の３人の杣頭、喜三郎、太左衛門、頭左衛門をはじめとした杣人たちであった。このことは、記録に残る最も古い盗伐とされた一件である。後日談となるが、同年８月の黒部奥山廻り御用の記録によると、先述の一件の場所を再確認した際、先月に木屋を焼き払ったときに併せて発見したイワナ釣り小屋と古い木屋の小屋組４軒を焼き払うとともに、小屋の腰石（建物の土台の根石の上部にある石積み）に書き記された「宝永八年（※宝永八年は1711（正徳元）年）八月野口山」の文字を見つけ、砂を使って磨き消したという。この場所が野口村の山域であるという当時の信州での認識がうかがえる」と説明されている。

(19) 大町市史編纂委員会編『大町市史』第３巻近世（大町市、昭和61年３月刊）、343頁。

(20) 善右衛門の内容を安政４年（1857）に写した史料が「言傳道作事」（個人蔵・大町市文化財センター保管、大町市指定）である。これについて、『大町市史』第５巻民俗・観光（大町市史編纂委員会編、大町市、昭和59年７月刊、525頁）には「野口村庄屋飯島善右衛門等は、嘉永三年（一八五〇）一一月、野口村より針の木峠を越え、越中の新川郡芦倉（芦峅）御姥尊橋まで、およそ四六 km 余の新道の開削を計画、塩・綿布・魚・笠・富山薬等の輸送を願い出たが不許可になった。このことは、天保のころより数回出されていたが、すべて不許可であったという」と記されている。

(21) 市立大町山岳博物館常設展「北アルプスの自然と人」『山と人　北アルプスと人とのかかわり－人文科学系　展示解説書－』（市立大町山岳博物館、2014年３月刊）、13頁。

(22) 富山市郷土資料館常設展示図録『富山城ものがたり』（平成17年11月刊）、平成25年度特別展「戦国越中の覇者　佐々成政」展覧会図録（平成25年９月刊）などを参照。

(23) 岩峅寺雄山神社蔵、「越中立山岩峅寺古文書」（巻子）。富山県指定文化財。

(24) 芦峅寺一山会蔵、「越中立山芦峅寺古文書巻二」（巻子）。富山県指定文化財。

(25) 芦峅寺一山会蔵、「越中立山芦峅寺古文書巻二」（巻子）。富山県指定文化財。

(26) 芦峅寺の大仙坊には佐々成政の妾であった早百合姫の鏡が奉納されている。『立山町史』別冊（立山町、昭和59年２月刊。202～203頁）には、「佐々成政の愛妃早百合姫が、成政に死を宣されて、日ごろ信仰をよせていた雄山権現に、女の魂といわれる銅鏡を奉納することによって加護を願ったと伝える」と記されており、佐々成政との関わりがうかがわれる。

(27) 浜松城で徳川家康と、吉良（現：愛知県西尾市）で織田信雄と、それぞれ対面していることは史料からもうかがえるため、成政一行が浜松へ向かったことは間違いないと考えられている。さらさら越えを含む立山ルート以外には、上路（現：新潟県糸魚川市）を越えて千国街道を通った糸魚川ルートや、安房峠（岐阜県と長野県の境）を越えて松本平へ抜けた安房ルートなどがよく知られている。遠藤和子『佐々成政』（サイマル出版会、1986年12月刊）、米原寛「佐々成政の「ザラザラ越え」考」（『研究紀要』第14号所収、富山県［立山博物館］、2007年３月刊）、鈴木景二「佐々成政の浜松行き道筋試案」（『富山史壇』154号、2008年刊）、鈴木景二「佐々成政の浜松往復前後の政治過程」（『富山大学人文学部紀要』58号、2013年刊）、小林茂喜『さらさら越え―佐々成政の決断―』（ほおずき書籍、2013年10月刊）、萩原大輔『武者の覚え　戦国越中の覇者・佐々成政』（北日本新聞社、2016年７月刊）などを参照。

(28) 原本は未見。コピーから、横帳で表紙もあわせて墨付きが八丁と考えられる。史料の翻刻については、久保尚文氏も「立山信仰関係史料など三題」（『大山の歴史と民俗』第15号、大山歴史民俗研究会、2012年３月刊）にて紹介している。

(29) 遠藤和子氏は、『佐々成政』（サイマル出版会、1986年12月刊）の中で、「この地で成政は山越えに必要な食糧、諸装具を整え、芦峅寺や岩峅寺の人びとを先達として出発した。享和二年（一八〇二）芦峅寺の日光坊が「立山姥堂仲宮寺出世祭事」のなかで、先導したのは十五人（岩峅寺六人、芦峅寺九人）、大先立は岩峅寺衆徒、円光坊弘栄と記している。このとき成政から一人につき米十三俵を与えられ、お礼にお札を差し上げたところ、銭一貫文ずつもらい、それで八俵ずつ買ったという。この記録を発見された高瀬重雄氏は次のように語られる。「いい伝えを二百年後に記録したとはいえ、先導の報酬が米二十一俵（約七十万円）とあるから嘘ではあるまい。仲語らも十三俵もらえるとのことで、我も我もと参加したのではあるまいか」こうして、十五名の先達者のもと、仲語、猟師、木びき、修験者（肯搆泉達録）らが同道した」と記している。

(30) 芦峅寺一山会蔵。『越中立山古記録』第３巻（立山開発鉄道株式会社、1991年10月刊）、28頁～29頁。

(31) 『北安曇郡郷土誌稿』（信濃教育会北安曇部会編、郷土研究社、1930年刊）に、「右の伝説（※西方の空から飛んできた話のこと、註（９）参照）は成政が内密にせよといふ言葉に応じてこのような説話を流布せしめたものだとも云はれている」とある。

(32) 天正14年の「黒印充行状」。芦峅寺一山会蔵、「越中立山芦峅寺古文書巻二」（巻子）。富山県指定文化財。
(33) 原本は未見。
(34) この史料には、佐々成政は弥陀ヶ原より一ノ腰へ掛りさらさら越信州野口へ道下ると記されている。
(35)「旧社　新川姫神社に復旧再興出願書」、大仙坊蔵。
(36) 註(25)と同じ史料である。
(37)「佐々成政寄進状」写し、富山県［立山博物館］蔵。
(38)『和漢三才図会』下（株式会社東京美術、昭和45年３月刊）、841頁。
(39) 芦峅寺の宿坊家に残されている江戸時代の縁起や勧進記に芦峅寺媼尊の由緒やその功徳が記されている。詳細は、平成29年度特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書の第１章を参照。
(40) 山の神としての性格については、平成21年度後期特別企画展『立山の地母神　おんばさま』展示解説書（富山県［立山博物館］、2009年９月刊）に詳しい。
(41)「由来書上帳」については、表書きに「但此分ハ嘉永七年寅九月旧記等持参ニ而出府仕候時、寺社所ゟ御尋ニ者、其山由来書見当り不申由被申聞ニ付、寛延二年之控へ之侭、書上申故、一寸茲ニ記置申事」とあり、嘉永７年（1854）に旧記などを持参したときに寺社所より立山の由来書が見当たらないことを申し聞かされ、寛永２年の控えのまま書き上げ記し置いたというのである。